
帝国繁栄記

アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国繁栄記

【著者名】

アキ

N1385M

【あらすじ】

技術力が少し変な異世界に、前世の記憶を持つた男が生まれた。彼は、自身の夢を実現すべく行動を開始する。現在、改訂版を投稿中。物語が追いつき次第、削除予定ですので了承ください。

第1話（前書き）

軍事関係の話については詳しく書かれないことがあり、それ方面が好きな方には物足りない作品になる可能性があるのを了承ください。

第1話

俺には前世の記憶がある。

その事実に気付いたのは、5歳頃であった。

それ以前から自分の“知らないけど知っている知識”として存在を主張していたのだが、3歳や4歳の子供に理解することなど出来るはずもなく、自我が確立するぐらいの年齢である5歳頃になつてようやく自分には前世と言える者の知識があると気付いた。

自覚すると、さすが子供といえるような速さで前世の知識を吸収していく、理解することになる。

「ルルは、地球じゃない？」

今まで習っていた知識と、吸収した記憶が一致しない。

俺がいる国はセオフィラス帝国。今から200年前に初代皇帝セオフィラス一世が建国すると帝国主義に則り領土拡大を行ない続け、現在では大陸の3大列強の一つとして名を連ねるほどの力をつけた。現在の皇帝はセオフィラス五世ことマリク＝ヴィ＝セオフィラス。

前世の〇に等しい歴史の知識でも、ここまで躍進した国あれば授業に出るし忘れることはないはずである。

それがないということは、ここが異世界ということにしたほうが納

得がいく。

記憶持ちという怪奇現象がおきているのだから異世界にいても変わらないと半ば無理やりな納得をした俺は、現在の国際情勢と技術力を調べることにした。

せっかく年齢に不釣合いな知識を手に入れたのだ。他人より優位のある物は自慢したいし、ネット小説で読んでいた転生、憑依、逆行モノでの内政チートに憧れもある。

幸い、知識を得るという意味では自分の生まれた場所は最高の場所であり、予想通り自分の知りたい情報はほぼ完璧に収集することが出来た。

まあ、幼稚園児ぐらいの子供が歴史書や新聞を読んでいる光景はシユールであったことは確かである。

そこはともかく、手に入れた情報を整理しよう。

技術や文化について

まずは軍事方面だが、他国は戦車を主力とした部隊を運用しているらしいのだが、わが国はMTというロー・ギアスの世界にあるKM-Fと似た人型機動兵器が主力となつていて頭一つ抜き出た軍事力を持つている。

このMTなのだが、「戦車のような攻撃力と防御力、歩兵のような汎用性」を考えて開発されており、機動力は戦車並み、運動性は全兵器を圧倒するというチートなものである。

まあ問題点は一個ないというわけではないのだが、それはまたの機会に話す。

陸がこのような近未来（？）的な装備なのに対し、海は大艦巨砲主義よろしく戦艦が主力で大口径の主砲が当然のように装備されている。

空は飛行艇がチラホラと戦場で見かける程度、それも偵察が主な任務であり戦闘にはまったく活用されていない。

生活様式は、意外と前世と変わらない。

さすがにパソコンや新幹線といったものは無いが、ダイヤル式の黒電話やカラーテレビに冷蔵庫、軍限定で言えばA4サイズなれど無線機がある。

ただ、西洋文化の道を歩んでいためか米といつものが一切無い。

……「こんなにお米が恋しいと思ったのは初めてではないだろうか。

そんな感傷に浸りながらも、次は国際情勢だ。

さすが帝国主義といったところか周辺の国と一緒に仲が悪い。

特に3大列強の一つであるトレスタン王国とは何度も戦争を起こしては結局決着がつかず休戦の繰り返しをしている状態で、周辺の国も軍事力は“ゾウとアリ”の差がありながらも対帝国連合を組んで抵抗していて王国とは「レゾン協定」なる“どちらかに帝国が攻めてきたら助けに向かいます”てな内容の協定を結んでいる。

帝国は国境の5割を山脈と海に面しているために四方八方から攻められる心配はないものの、下手をすれば中小国連合＆王国VS帝国

とこう構図になる可能性があり、補給や軍事力の関係で迂闊に攻めることが出来ず国境沿いで緊張状態が続いている。

いくら強い兵器が合つたとしても数の暴力には勝てないといったところである。こうである。

この状況で俺はどう動くべきか。

空の重要性がまだ分かつていないうだから、そこを突いて見るか？いや、MTがあるせいで他の兵科が貧弱だから、少ししかない軍事知識から強化を図つて見るか？

……くそ。

こんなことなら、前世で軍事や内政の勉強しどくべきだった。

「二ール？ 何処に向かつて話しているんだい？」

「お兄様。二ールの行動を気にしたら負けよ」

「……」

いつの間にか漏れていたのだろう俺の独り言にて、心配そうに覗き込む兄。

そんな兄を呆れた声で、俺に対する失礼なことを言ひ姉……ちなみ二ールとは俺の名前である。

両者の性格を現すかのよつた台詞は置いておくとして、現在俺は自分の部屋にいて兄姉も俺の部屋にいる。しかし、俺は一人の入室を許可した覚えはない。

「兄様、姉様。人の部屋に入るときはノックをしてから入るものかと思うんですが？」

「いや、私は止めたんだが……トリシアが」

「何度もノックしても出ないのであれば、ニールの部屋なんて勝手に入ってしまえばいいんですよ」

それは令嬢としてどうかとも思つが、姉様　トリシア　は俺の事を心配しての言動なのだと知つてるので文句の言葉ではなく、苦笑いが漏れた。

……姉様が睨んできたから顔を真面目に戻そう。

「えつと、兄様と姉様は俺に何か用が？」

「そうだった。……父上が一族全員に召集をかけた」

兄様　ルベルト　の言葉に、ズンと空気が重くなる錯覚を覚える。

これは重大な発表があるときに行なわれる召集であり、現状でいえば連合と王国との戦争についてである。

本来であれば召集されるのは成人した14歳以上の者なのだが、実力主義社会でもある帝国では才があれば例外的に出席することが出来る。

俺が知つてゐる限りで2人、そんな天才を知つてゐる。当然俺はチートを使つてゐるから天才とは言えない為に抜かしていくだ。

「……分かりました。すぐに準備します」

「ああ、頼む」

兄姉が退室すると入れ替わりに俺の付き人とメイドが現れ、見事な手際で出かける準備をしていく。

そういうえば、まだ皆に名乗つてなかつた。

ニール＝ラ＝セオフィラス。今年で13歳になる第5皇子・第7皇位継承者です。以後お見知りおきを……

第1話（後書き）

主人公と世界の簡単な説明でした。

「ほら、あれが“例”の……」
「　内の1人で……」
「イルスイス将軍を言い負かしたとか……」
「しかし、武のほうは……」

兄に続いて俺が“謁見の間”と呼ばれる広い部屋に姿を現すと、先程まで静かだった周囲が上記のような聞き取れるものや小声過ぎて聞き取れないものを身近な人間と囁きあい、ざわめきが起きた。

「ニール、気にしてはダメだよ」
「大丈夫ですよ。兄様」

先頭を歩く外用の凜々しい顔をした兄が、前を向いたまま後ろにいる俺に優しい言葉をかける。

確かに周囲が本人を目の前にして噂話等をしているというのは、精神的には結構キツイ。

それも大半が、妬みや悪口であるからトラウマになる可能性は充分にあるのだ。

兄という絶対的安心感を抱かせる大きな背中がなければ……

俺を守るように立つ兄の背に、しつかりと無事を伝えて自分の定位置へ移動する。

この謁見の間は奥にある王座と入り口を赤い絨毯が繋ぎ、左右に一族が立ち並ぶといった様式を取つていて王座　皇帝　の近くに立てる者は当然力のある家であり、当家は“五大家”と称される上から数えて5つ目の位置に立つてている。

家の代表は長男である兄が勤めていて、俺は出席を許された“おまけ”に過ぎない。

兄様バリア（俺、命名）に守られている俺は、ここに来た目的の一つである人間觀察をしようと周囲へと目を向ける。

俺のような特例で出席できる者に対して、この召集は何の強制力もない。

それなのに、陰口を言わることが確定していくこの場に来るのは他家の主要人物の顔を知るためにある。

しかし、たった200年で小国から列強の一つに数えられるほどまでに成長させた上の人はどんな人物だろうと楽しみにしていたのに……映つてくるのは、きらびやかなドレスに身を包み口元を扇で隠しながら近くの者と世間話や自慢話をする妙齢の女性たちに、派手な刺繡を施された礼服を着る文官や武官のような男達がどう聞いても脚色された武勇伝を語る姿ばかりである。

これから何をやるのか分かっているのか、少し疑問に思つてしまつ
ような服装と行動である。

まあ、他家より当家の方が優れているという自己主張の意味がある
のだから分かつていても着ている人や行動しているのだろうが……

ふと、俺と同じように場違いな年齢の少女と目が合つた。

周囲の女性たちとは違ひ淡い緑の質素なドレスに身を包み、腰まで
あるブロンドの髪も適当に纏めたという素材が良いだけに矛盾する
ような言葉だがもう少し着飾つてもいいようなファッショնである。
彼女は俺がさつきまで考えていたこと同じように考えていたのか、
周囲へ軽く視線を送つた後に軽く肩を竦めて呆れた笑みを送つてく
る。

それに対して、俺も軽く肩を竦めると苦笑いで返す。

この目が合つた少女こそ、天才の一人であるエレン＝ル＝セオフィ
ラスで、わずか10歳にして帝国軍の主力であるMTの開発に参加
している“本物”だ。

兄のおまけとしてル家に行つた時に偶然出会い、歳が近いことと同じ天才と呼ばれている身から仲良くなり、今のような日だけの会話できるほど仲になつていて。

いや、本当は互いの性格を知つてゐるからなんとなく分かるだけだつたりするんだけどね。

「つん、つん」

兄の喉を小さく鳴らす音に気付き、顔を向けると上座へ視線を向けるようにとジエスチャーを送つてくるので「来たか」と小さく呟きながら体ごと上座へと向く。

しばらくすると、長槍を持った屈強な衛兵二人を引き連れた“魔王”と比喩されそうな男が強烈な存在感を放ちながら現れた。
それと同時に、雑談をしていた周囲の人間は一様に口を閉じると深々と頭を下げる。

当然、俺も周囲に習い深く頭を下げて次の行動を待つ。

後ろに引き連れた衛兵以外の者が頭を下げているのを横目に、彼は齡50を超えていると思えない身のこなしで王座へ座ると、すぐさま衛兵が両脇へ立ち置物のように動かなくなる。

そこまで終わり、俺達はようやく頭を上げて男皇帝と顔を合わせることができる。

少し挑戦的な視線になつていて、俺は父親である皇帝の姿を捉えた。

30代と言われても信じてしまいそうな若々しい顔に、年季の入った深みを持たせ皇帝のみが着ることが出来る赤を基調とした服を着こなす姿は最初に比喩した魔王という言葉がピッタリだ。

「皆、よく集まってくれた

「……」

拡声器などを使つていないので腹の底へ響く声が部屋を満たして、本能的な恐怖から震えそうになる体を氣力で押さえ込む。

「さつそくだが、我らが帝国は明日にも王国へ宣戦を布告する

「……」

数瞬の静寂の後、どよめきが部屋を覆つた。

いきなりのことで困惑するものが大多数の中、軍事に詳しい者からは信じられないという表情が俺を含め、浮かんでいることだらう。

日本語である。」
.....

第2話（後書き）

天才その一と皇帝の紹介と、突然の布告宣言のお話

ロワイヤル技術研究部

兄と姉の協力により設立可能となつたチートを実現するための研究開発部門である。

ラ家が多大な出資をしている軍産複合企業「W E P C 社」の研究部門の一つとして設立されているが指導権や人事権は全て俺に一任されており、技術交換以外では全く接点がない異様な部門になってしまっている。

当然そんな部門の設立に企業上層部は難色を示すものの、多大な資金提供主からのお願いであるため強く断ることが出来ず結局押し切られたそうだが、もう少し待てば笑みが止まらなくなるから我慢してくれ。

設立できると分かると同時に、俺は中小企業で才を埋もれさせている人物や亡命者をスカウトマンに見つけてもらつて引き込んでいく。驚いたことだが、帝国主義のこの国に亡命していく他国の人間は以外にもいる。

特に山脈を挟んだヴァレンタ皇国では民族差別が厳しく、国外逃亡を図る人は年々増え続けているが国境沿いは軍が見張つており、警備の薄い厳しい山脈を乗り越えて帝国へ逃げてくる人も出始めている。

その中には、迫害されている民族だからという理由だけで除隊処分

を受けた軍人や、退職処分になつた技術士がいたりする。

そんな人間をバンバン雇用していくために、彼らが信仰している宗教内の神である「ヤードの化身」として崇拜しだすものが現れたりしている。

人殺しの道具を研究・開発させている人間を神様の化身として崇めていいのか疑問に思うが、人から尊敬されたときの高揚感という麻薬から逃れられず自由にさせてしまつてはいるのが現状だつたりするのだけどね。

また、開発した兵器のテスト部隊もそれら亡命者の中にいる元軍人から選び出して運用させる計画を立てていて、最初は止めようかとも思ったものの結局はMTの操縦訓練もさせている。

手始めに飛行艇の戦闘、攻撃、爆撃機への改修案を骨組みを俺が提示してそれに肉付け作業をしてもらい企業へテスト機と共に提出すると、大変好評で軍からの発注も大量に届いていると、感謝の言葉と“黄金色”的お菓子を貰つた。

しかし、そんな順調なスタートを切ると、矢先に、王国への宣戦発表である。

まさか、飛行艇の改修案が原因?

確かに戦果は期待してもいいが、それぐらいで王国＆連合を相手に勝てるとは思えない。

勝てたとしても疲弊しきつてしまい、漁夫の利を狙つて第三三国から攻められて滅亡へ一直線だ。

軍備増強が1年前から本格化しているが、何処まで揃えることが出来たか……

「それで、私の所へ来たの？」

「もしかしたら、新型でも開発したのかと思つたんだけど」

場所は位の高い者限定の待合室。

あの後の召集は五大家の代表者のみの会議へと移行するということとで、詳しい説明を受けることが出来ずに追い出されてしまった俺は、兄が出席しているので開戦理由を聞いてくれているだろうが、それまでに自分なりに調べてみようとMT開発をしているエレナに尋ねている所だ。

ちなみに、エレナの家も五大家に入っていて代表である姉の帰りを待っているところだ。

「残念。改修機が数機出来ただけで、新型は開発されてないわ」

「そつか

食べる?と差し出されたクッキーをお礼を言つてから貰ひ、ポンポンと隣の席を叩いて薦めてきたので素直に席に座り更に質問を重ねる。

「突然の開戦理由は、いったいなんだろうね?」

「貴方のところが原因じゃないの?」

「へ?俺?」

正解を求めた質問ではなかつたのだが、予想外の答えが返つてきて変な声が喉から出てしまつた。

そんな俺の行動に、大人がするよな微笑を浮かべながら紅茶を飲んだ後

「貴方、連合へ“ちよつかい”出してたみたいじゃない」

「つつ……それ、どこから?」

情報封鎖を行ひながら進めていた事柄が、筒抜けであつたことに唸り声を上げながら情報源を聞いてみるが、多分答えは……

「私が、タダで教えると思?」

「……今、研究中の対戦車無反動砲の開発情報で」

「歩兵専用?」

「その予定、ただ小型化できればの話だけど」

この世界の戦車の撃破方法は3つしかない。

同じ戦車の砲撃か野砲の砲撃、そして歩兵が吸着爆弾を戦車に直接貼り付けることでの爆破である。

しかし、これは他の国の場合で帝国では「MTによる銃撃と近接攻撃」が追加されるし、俺の出した飛行艇の改修案が正式採用されているので、しばらくすると「飛行艇による爆撃」が追加されるだろう。

当然、他の方法でも破壊することは可能だが確実性がないので、緊急事態を除き使用することは無い。

そして見て分かるとおり、様々な場面で登場する歩兵が戦車を破壊する方法に危険すぎる戦車に接近しての爆破しかないのだ。

そこで、戦車の装甲が完璧でない現在なら、前世の世界では効果がなくなってきている対戦車砲を開発しようとした試みた。

目標としては歩兵が携帯可能でありかつ無反動で使用できるものを目指しているが、小型化が難航しているので直ぐには実用化できないのが現状だ。

それでも、ガスを使用した反動をなくす技術はそれなりのレベルに到達できたのでMTに搭載する火器に転用は可能なはずである。

「まあ、貴方が言つのだから使えるものでしょうね。いいわ、教えてあげる」

「そりやあ、どうも……で?」

「……今度から諜報員を雇つときは、お酒に強い人を選んだほうがいいわよ」

「…………ありがとう。心得ておくれよ」

いたずらの成功した子供のような笑顔のエレナに苦笑いで答える。
そして、ただ単に諜報員が酒に酔つて仕事内容を話したという呆れた事実に、手についていたクッキーを乱暴にかじった。

第3話（後書き）

主人公のチート能力発動と謎の行動のお話

対帝国連合 首脳国會議

「ですから！何度も言つようこそ、我ら連合も帝国の持つ人型兵器を持つべきなのです！！」

「しかし、今から開発や量産をして間に合つとは思えませんが？」
「然り。そんなことに生産ラインを使つより、現存兵器のさらなる量産を進めるのが一番効率が良い」

「だが、それらの兵器が帝国の鉄人形に蹂躪されたのでは？」
「あれは奇襲と数の差が小さかつたためによるものだ。数さえ揃えれば帝国など、簡単に蹴散らすことが出来る…」

「その数が揃つまで、彼奴等が待つてくれればいいがのうへ…」

「そもそも、技術交換が今だ活発に行なわれていながら問題ではないのか？」

「では、貴方の国から技術提供を始めてください。されば、我が国も技術を提供しましょう」

「それは、隠者国家には酷なことではないかな？」

「貴様っ！加入まで帝国に尻尾を振っていた犬如きが我が国を愚弄する気か！！」

「なんですよ…」

「話が逸れているぞ！今は帝国に対抗する手立てを考えるときではないのか！！」

「この際、境界線沿いに要塞なり建設して、トレスタン王国が帝国を滅ぼすのを待つたほうが……」

「我が国に、貴國の盾になれとこいつのか！？」

1年前から帝國が軍備増強を行い始めてから頻繁に行なわれるようになつた首脳会議は、いつものように荒れに荒れていた。

元々、思想や主義などが全く違つ国同士が帝國の侵略に抵抗するという目的だけで組んだ連合である。

本来は場の混乱を収めるべき連合の議長も、場の混乱に拍車をかける一人となつてしまつて止める者がいない危険な状態へとなつてゐる。

このままいけば「やつてられるか」と怒りが頂点になつた国が退出してしまつことで中断に近いような閉会になるのだが、今回は会議中にも係らず転がり込むように入室してきた衛兵によつて激変した。

「何事だ！？」

「へ、陛下。緊急事態です！..」

各国のトップたちが自分を見ているという普段であれば失神してしまうほどの状況で、彼は別の意味で失神してしまいそうなほど顔を真っ青にして信じられないような言葉を発した。

「と、トレスタン王国にて内戦が勃発！それに呼応して、帝国が王国に対しても宣戦を布告しました！..」

トレスタン王国は権威主義国家で、王族とそれを支える上級貴族が政治を行っている。

これは、事情を知らない人間から見た王国の姿だ。

実際は、王族は上級貴族の傀儡となつていて彼等の利益のために政治が動かされ、本来は早期終結が可能であった帝国との戦争を長引かせて、さらに周辺の中小国に対しても連合を組むように働きかけるとともに協定を結ぶと、兵器や物資を輸出して多大な利益を獲得していた。

こうした貴族の動きを知っているものは多数存在した。

しかし、ほとんどの者はそこから出る利益が欲しいがために口を閉ざし、進んで隠蔽工作に手を貸す者も現れはじめる。

そして帝国も、利益を得るために小規模ながらも隠蔽工作に手を貸していた。

反上流貴族派を王国内で、育てながら……

「そして、結果がこれか……」

指揮系統の混亂から組織的な行動が取れていらない王国軍を、帝国軍のMTと戦車の機甲部隊が蹂躪し運よく生き残った部隊も遅れてやってきた歩兵が殲滅していく。

奇跡的に抵抗しているところは、この世界で初めての戦術爆撃機RW-02「リーグ」が編隊を組んで対空装備のない敵の頭上を飛び回り爆弾を落としていく。

が、訓練が充分ではないのが如実に現れて、タイミングを誤つて上昇が間に合わずに地面へ墜落する機体や、緩降下爆撃だつたために急遽対空として使われた敵の野砲の餌食になつていたりして少なくない数を損失している。

だが、それを含めても帝国は順調に快進撃を続けていて追撃戦へと移行していた。

「ニール様。全テスト部隊が帰還するそ�です

後ろにいた通信兵が、背負つている大きい箱から伸びる受話器に耳を当てながらテスト部隊が戻ることを教えてくれた。

「分かった。それじゃあ戻るつか

「はつ

近くに控えていた護衛の兵士一人に声を掛けてから、小走りでその場から離れる。

うん。正直、ちょっと怖かつたんだ。

いくら離れているとはいえ前世は平和な日本、この世界ではまだ戦場に出ていない子供には、遠くから聞こえる銃撃音や振動でも十二分に怖い。

ここまで怖いとは思つてもなかつたから少しパンツを汚してしまつたし、小声だけど悲鳴を上げて護衛の人や通信兵に微笑みと共に生暖かい視線を送られてしまった。

顔見知りの人達で良かつた……本当に良かつた……

ちなみに、この場に俺がいることは司令官にテスト部隊の参戦許可を貰いに行くときに一緒に許可してもらつた。

いや、許可させたと言つた方がいいのか家柄が家柄だから……でも、自分で開発した物が戦場で動く姿を見たかつたんだ。今は少し後悔してるけど……怖さ的な意味で

近くに止めてあるバギーのような4輪駆動車に乗り込むと、すぐに周囲を警戒していたバイクに乗った数名の兵士が周囲を固めるような位置についてバギーと共に一斉に走り始めた。

まあ、自分の存在がどのようなモノか理解しているとはいえ、少し萎縮してしまいそうな護衛である。

氣を紛らわすために、帰還中のテスト部隊の状況を聞いてみた。

「3機編成で36機が出撃し、損失は12機です」

「……損失の内訳は？」

「操縦ミスによる墜落が4機、敵の攻撃による撃墜が6機、エンジントラブルによる墜落が2機です」

「6機か……」

出撃した3分の1を損失し、その半分が敵の迎撃によるもの。
……多い。

新兵器、未熟なパイロットといつマイナスを加えると普通なのだろうか？

そういう知識が無いのでよく分からないが、機体はともかく1機につき搭乗員が2名つけているから24人もの貴重なパイロットを失ってしまったのは結構痛い。

もともと輸送用に使われていた機体を、戦闘用に改修するのには若干無理があつたというこか？

素人目からしても、リーグが鈍足だと分かる。

だから、急遽対空として使われた野砲で撃墜される機体が出た。

「エンジンの開発なんて、俺には出来ないっての」

「ニール様？」

「ただの独り言だよ」

「そ、そうですか……」

第4話（後書き）

開戦理由と主人公のチートのような活動のお話。

今回の侵攻で、トレスタン王国と対帝国連合にとつて最悪の結末が訪れることとなつた。

王都は大混乱に陥つていた。

帝国の侵攻と、反上級貴族派の反乱軍に上級貴族は蜘蛛の子を散らすように他国へ亡命していった。国民と国王を捨てて……

だが4割以上の軍が反乱軍に協力している状態で逃げ切ることは適わず、全員が反乱軍に拘束されると一族諸共処刑されてしまう。そして、今まで政務を牛耳っていた国王にこの内戦を収めるすべは持つておらず、帝国と反乱軍に挟撃される形になつたために国民の安全を保障とした条件の元で降伏し、3大列強といわれた大国はその名に似合わない哀れで呆気ない終わりを迎えた。

この突然の同盟国と言つて問題ない大国の滅亡に、連合は分裂とう一番やつてはいけない行動に出てしまつ。

もう帝国に降伏するしかないという国々と、最後まで徹底抗戦だという国々に分かれて小規模な戦闘が始まつた。

まあ、俺がこうなるように“ちょっとかい”を出していたんだけどね。帝国と国境が接している国とそうでない国は、連合を組んでいるの

かと聞きたくなるほど仲が悪かったために、ちょっと煽っただけであるが……。

そんな勝手に仲間割れしている小国達を帝国が放置するはずもなく、元王国領土を反乱軍と分譲併合後に連合へ宣戦布告するとただ行進しているのと変わらない速度で侵攻し全ての国を併合してしまった。

こうして、数年続いた膠着状態はたった1ヶ月ですべてが終わり、残つたのは帝国が大儲けしたという事実だけであった。

流れるような肩まで伸ばしたブロンドの髪を後ろで束ねたサファイヤのような瞳を持つ白人の男の子が、こちらを睨んでいる。

「……似合ってるのか？」

「ええ、良くな似合いです。ニール様」

鏡の中から自分を睨んでくる自分を更に睨み返しながら、自分の服装に疑問の言葉を出すも後ろにいるメイドから即答で返される。

「うん。似合つてるよ」

「シーナの見立てだから、当然よ」

せりに、俺が髪を短くし垂れ目になつたような顔と、腰まであるブロンドの髪を綺麗に結い上げた人形のような綺麗な顔が鏡に映りこむと、俺の格好に高評価を与える。

いや、最後のは先のメイドを褒めているだけのような……だが、まあ

「兄様や姉様まで……」

褒められて悪い気分になる人間はそうそういない。

ジン公国で軍の高官が着ている制服と似た服に身を包み、少佐のバッヂをつけた俺が顔を赤くした姿を鏡は？ 偽りなく写し俺の赤面をさらに加速させていたりした。

セオフイラス一族の男たるもの一度は軍人をやる。

上記のような先祖から代々続いてきた“しきたり”があり、俺もそれに習い14歳になり成人した二日前から帝国軍少佐になると軍へ

と身を置いた。

本来であれば、一族の人間でも少尉や中尉等といった階級から始まるのだが俺の場合は“天才”というズルをして手に入れた称号と、戦闘機（戦術、攻撃、迎撃）の開発による帝国への貢献といつ一つの要素で異例の昇進をしてしまった。

評価してもらえるのは嬉しいけれど、航空機はまだ改良の余地が大量にあるため俺的には未完成といつていい兵器が高評価されている現状は、恥ずかしいやら嬉しいやら複雑な気持ちである。

「それで、今日も披露会を？」

成人の儀と、軍の入隊式を終えた俺を待っていたのは披露会の毎日だった。

一族の者は勿論のこと各業界のトップや記者団に、軍事同盟国となつたトレスタン王国改めトレスタン皇国の関係者が集まつた大規模のものを一日連続で開いており、肉体的にも精神的にもそろそろ悲鳴を上げそうである。

今日もあるかもしれない披露宴を思い浮かべて憂鬱になつてゐる俺は、兄から出た返事にいい意味で裏切られた。それが長くは続くかは別として……

「今日は、一ールが指揮することになる部隊との顔合わせだよ」
「……ああ、そういえば」

披露宴のゴタゴタや疲労から忘れていたが、少佐になつた俺に1個

中隊が「えりれることになつてゐるのをすっかりと忘れていた。

帝国での軍は、軍団が最大単位として数個の師団がその下に、連隊、大隊、中隊、小隊と続く編成をしている。

そして、俺の中隊は第4軍第11師団第3機動連隊第18大隊第13中隊として配属される……てか長い上に言い難いな、おい。

しかし、部隊を持つということは執務を行なわないといけないということであり、ロワイヤル技術研究部 長いから今後は“技研”と略すことにしてよ。 その業務と合わせて行なわないといけなくなる。

内政物のSSでよく見る執務に追われる主人公を思い出し、思わず身震いしてしまったのは仕方ないと思う。

兄姉は、俺が緊張で震えているとか勘違にしているみたいだけど……

「IJの中隊を指揮することになつた、ニール＝ラ＝セオフィラス少佐です。よろしく」

広場に集まつた中隊へ、そう挨拶をしながら彼らの顔を見渡していく。

学校の朝礼台のような物の上に建つてゐるのですべての顔を見ることが出来るが顔見知りの兵が目立つ……というか、顔見知りの兵士しかいない。

軍人でも兄のところから数名、俺の補佐としてきている者。

先の王国や連合との、戦争時に知り合つた兵達。

技研のテストパイロットや整備兵達。

うん、兄（姉）の思いと俺の思惑が思いつきり重なつてしまつてゐるね。

しかし、14歳になり成人したとはいえ、彼らからすれば子供な俺が指揮するのだからある程度見知つた関係の兵のほうがいいし、この状況は大歓迎だ。

さつそく中隊長となつた俺は、その田の内に大隊長である兄を通りして上へ“中隊の再編成”的申請を出して……一日で通つた。俺の名前はそれなりに使えるみたいで一つ返事で許可を取れたとか取れなかつたとか……

さて再編の理由なのだが、戦闘機を部隊に組み込むためであり、また技研が開発した兵器の運用テストをするためには今の編成では無理があつたためである。

MT-9機と戦車15両の機甲兵器を陸上戦の主戦力とし、歩兵20

0名がそれを補佐したり彼らが作戦行動の取れない地形の主力の役割を果たす。

空は、前回の反省を踏まえ改修機ではなく一から作り直したRW-03「リーグ？」を3機編成30機を配備して航空支援や偵察などの任務に当たらせてたり、輜重部隊の輸送手段が馬車のため高速輸送機RSW-01「イース」10機からなる輸送部隊を配備。

また、空挺部隊も組織する予定である。

前世の世界では規模の割りに効果が薄かったという評価があるが、対空兵器や迎撃機がない、現れても対処可能な今なら敵の背後に部隊を送り込めるのは非常に有効だと思う。

また、王国の一部と連合を併合した帝国は、その支配体制を完全にするまでは当分軍事行動を取ることはないだろうから、充分な訓練期間が確保できる。

うむ、これだけ大規模に再編を行なつたんだ。近いうちに大量の書類に苦しむことになるだろうから今の内に寝溜めしておこう。

後日、涙目になりながら必死に書類整理をするニールの姿を多くの仕官が目撃した。

第5話（後書き）

「都合主義全開による、王国と連合の滅亡&着々と進んでいく主人公のチートのお話

第6話

「ニール様と私が？」

「ええ、そうよ」

12歳の誕生日を祝つてくださつたお母様から誕生日プレゼントとして、何故か“見合い話”を贈られた。

皇族の一人、ニール・ラ・セオフィラス皇子。

“M・Tの母”や“鬼神”に並ぶ“魔術師”的二つの名を持つ、皇帝になれずとも帝国の未来を担う一人といわれている人物であり、間違つても一企業の娘で成人もしていない私程度の人間が政略結婚を含め一緒になれる人物ではない。

「お母様、これは何かの間違いではないのですか？」

「いいえ、正式に届いたものです」

私の問いをキッパリと否定してから私の肩に手を置くと、真剣な表情で自分にも言い聞かせるように言葉をかける。

「リナ、これは我が家将来が決まる大事な話よ。分かるわね？」
「は、はい」

厳しくも優しいお母様の初めて見る鬼気迫った表情に、怖くて逃

げ出したくなるが肩を掴まれている為に身動きがとれず、田を逸らすこともできない。

「どんな手……そつ、体を使ってでも必ず成功させないさい」
「か、からだ……」

お母様の言葉で近頃、気になりだした“男女の嗜み”が頭を過ぎり、瞬時にして卑猥な想像が浮かんでしまった自分に顔がボツと火がついたように熱くなる。
それに、お父様以外の男性の方ときちんとお話をしたことのない私が、ニール様を口説くという高度な技が出来るのか心配でならない。

しかし、今はそれよりも……

「ふ、ふふ……ニール様が私を“お義母様”と呼ぶ日が来るのね」

獰猛な肉食獣と幻視してしまつよつな笑みをした、お母様から逃げたい。

ゾクッ

「ひあつーー？」

何の前触れもなく背筋を襲った悪寒に、思わず喉から情けない悲鳴が漏れた。

そして、現在進行形で執筆中だった報告書が、あと少しで書き終る所だった報告書が、台無しになってしまふという涙目物の事件も起きてしまふ。

「あああああああつーー！」

自分で驚くほどきれいに書けていた文章が、最後にあらぬ方向へと伸びる黒い一本の線で台無しになつてゐる様子に思わず叫んでしまつ。

この世界にはタイプライターがあり、それを使つことも出来るのだが重要案件の場合は提出者が自らの手で書かないといけないしかし、手首にテープリングを巻きながら十数枚もの数を書き続けている。なので「たかが一枚、されど一枚」といつた感じである。

「ううう、俺の10分を返せ~」

「少佐。申し訳ありませんが、もう一度お願ひします

「う~」

兄の下から俺の補佐官として派遣されたセラス＝リメトリア少尉が、新しい用紙を俺に差し出してくる。

22歳という年齢に見えない口り顔に赤毛のボニー・テールという外見に似合はず、事務処理が「お前はコンピュータか!?!?」と叫びたくなるほど早くて正確で本来は100の疲労感を伴う仕事を60にまで軽減してくれるスーパー補佐官だ。

そんな彼女から用紙を受け取り、ペンを握り書き出そうとするが先程の衝撃が抜けきつていないために最初の一文字に手が出せない。

「……氣力が回復するまで、他の仕事を片付けよ~」

紙とペンを端に寄せ、顔ほどの高さがある報告書の上に手を出す。

「おらはサインか判子を押すだけでいいので、たぶん気分転換になるはずだ。

セラス少尉は俺の行動を軽い溜息と苦笑いをするものの特に何も言ひことなく、自分の机にある“書類の山脈”を恐ろしい勢いで減らしていく。

俺はその光景に引きついた笑みを浮かべた後、ペタペタと内容を読んでから捺していくと技研からの報告書に嬉しい情報が載つていた。

「おっ、力チユーシャの試作機が完成したか」

自走式多連装ロケットランチャー、通称力チユーシャ

前世の某赤い国の兵器をそのまま真似て作った面制圧、もしくは面支援を目的とした兵器である。

戦車や野砲の開発はエンジンや砲に関する知識がない俺が口をだしてもいいことにならないので、前世から使えそうな兵器を思い出して試作兵器としていくつか開発しており、この兵器もその中のひとつである。

作り方は簡単で軽トラの荷台へ鉄レールを柵状に何本か引いてから上にロケット弾を乗せるだけ、という材料があれば誰でも作れる代物だ。

あとは、乗せている弾の重量と射角、天候や風速等から距離を計算して発射すれば“爆弾のシャワー”が完成する。

次弾装填時間と命中率に難があるものの、そこは数でカバーすれ

ばいいし、簡易な構造をしているために故障は少なくて、計算が出来る人間が一人でもいれば後は面倒な装填作業だけなので練度が低い部隊でも運用可能だ。

将来は弾頭に爆弾ではなく、小型爆弾を詰め込んだ筒を装備してクラスター爆弾モードキを作る予定で、これにより一層の広範囲攻撃が可能になる。

とはいって、今は実績も何もあつたもんじゃないから俺の中隊にある砲兵部隊へと配備して有効性を証明していかなくてはならない。簡易とはいって不具合があるかもしけないからテスト運用しないとだからね。

「……ん？」

将来のことと二ヤソウになる顔に渴を入れつつ、次の報告書を見たときに見慣れない文字を発見して思わず声が漏れた。

そして、俺に机にある最重要案件以外の書類全てに目を通しているはずの、セラス少尉へと尋ねることで疑問を解決しようと声を掛けた。

「ねえ、少尉」

「どうかされましたか？」

「これって、何？」

手にした報告書をセラス少尉に見えるようにすると「ああ」という納得したような声を上げて、俺の疑問に答えられくれる。

「これは、リナ＝ルミノレフ様とのお見合いの日時報告です」
「…………は？」

予想外の答えで間抜けな声を上げて固まってしまった。

俺とリナって子のお見合い？なんで事後報告なんだ？

政略結婚だらうけど、それにしたって見合いの話の前に相手が誰か俺に事前に報告があつてもいいはずじゃないのか？

というか、そのリナって子はどんな子か知らないのだけど有名人なのだろうか？

自惚れて言わせてもらえば俺は結構な有名人のはずであるから、相手もそれなりの人物になるのと思うのだが、ルミノレフという性に聞き覚えは無い。

「こちらが、リーナ様のプロフィールになります」

「…………ありがと」

こちらの思考を読み取ったかのように、セラス少尉が絶妙なタイミングで用紙を渡される。

ただ、スカウトマンが有能な人材を見つけたときに、報告書として出された様式書類と同じ物を出されて少しだけ気分が下がるが気にしないように紙を受取り、内容に目を通す。

「何々…… 国内唯一の航空機生産工場であるルミノレフ航空機工場の社長レナード＝ルミノレフ氏の一人娘で今月で12歳か…… 12歳

？」

ありえない年齢に自分の目が疲れているのかなと指で軽く揉み解してから、再度年齢の項目に目を向けるが、“12”という数字が変わることがない。

「また、未成年かよ！？」

「後2年で成人します」

「それまでは未成年でしょう！？」

5歳未満から上がったとはいえ、前世の感性持ちには14でも未成年だというのに12歳とか小学生じゃねえか！たった2歳差でも10代じゃ大きな違いだぞ！！

「ああ、それでですか…

「……何が？」

俺の反論に、何か納得したような声と表情に何か嫌な予感がする。予感が的中しないように祈りながら、納得した理由を問うた俺に出したセラス少尉の答えは……

「ルベルト大佐から”少佐へのお見合いに関する情報一切を遮断するように”と特命がありましたので」

「兄様…………！？」

俺の絶叫が虚しく響いてから1週間が経過した。

ちなみに、この世界は1年は365日、1日は24時間で前世と変わらない。

しかし言語は当然違っているので、日本語が染み付いている感性では覚えるのに苦労したよ。例えば……

「一ノ瀬、別のことを考えて現実逃避しない」

「…………はい」

心の準備などする暇はなくってしまった（俺的）メディに平常心を保つため別のことを考えていたのに、姉様の一言で思考が強制シヤットダウンしてしまい頃垂れながら、先頭を歩く案内人の後を姉様と一緒についていく。

執事のような男の後を、淡い緑のドレスに身を包んだ姉様と、何故か軍服の俺がついて行くという変な絵面を疑問に思つも、姉様曰

く「軍人なのですから、当然でしょう?」とのことなのだが、……うん、何が当然か分からない。

まあ、タキシードや白い服とか着なくていいのだから、良かつたと言えば良かつたから文句はないから礼儀的に間違つていなければ良い、新品とはいえ着慣れているタイプの服なら、多少なりとも緊張が和らぐしね。

質素な部屋に通された俺は、言われるがままに席に座つて置かれた水を一気に煽つた。

喉を通つていく冷たい水と共に緊張も流れていつたのか、幾分かマシになり「まあまあね」と一応だが姉様が納得する落ち着きを手に入れた。

そして、それを待つていてくれたかのように相手方がやつてきて、とつとつ半ば決定しているお見合いが始まつた。

子犬のような子。

リナ嬢の第一印象は、そんな感じであつた。

動きやすそうなオレンジのドレスに身を包み、ショートカットの茶髪に犬耳?と思つてしまふカチューシャをつけ、グレーの瞳が恥ずかしさから少し潤み、目が会つた時に微笑むとパアと顔が綻びモフモフの尻尾を喜びで振つている幻想が見える。

……ヤベエ、超可愛いんだけど

恋愛感情は芽生えなかつたものの、小動物的な行動に緊張が消えて保護欲が芽生えると同時に苛めてみたいといつ黒い感情も小さく芽生えた。

「ニツニール様は、好きな季節はありますか？」

勇気を振り絞って言ったと思える発言に、我が子の成長を見守る親のように頬が緩んでしまうのを自覚しながら少し考えて彼女の質問に答える。

「そうですね。秋が好きですね、あと冬も」

俺がいる大陸全土には、日本と同じような明確な四季が存在する。ただ、12ヶ月で1年と言う所まで同じでも12月～2月は冬ではなく夏であるといった日本とのズレが存在している。

現在は夏も終わり秋になろうとしている頃で、丁度過ごしやすい日々が訪れたといった感じである。

話を戻し、俺の答えを聞いたリナ嬢はパアと顔を輝かせた。

「私も、秋と冬が好きなんですね！」

好きな物が同じであつたというのが、よほど嬉しいのか緊張が吹き飛んでしまつたらしく彼女から質問攻めが始まつた。

好きな食べ物や色といった定番から始まり、テレビ番組の話、ゲームの話、本、花、スポーツ、趣味 etc…

自身と同じ感性や趣味があるたびに、顔を輝かせる彼女に高感度が鰻上りに上昇していく。

チラリと隣にいる姉様に目を向けると、勝手に何かを感じ取ったのか皆の視線が集まるように小さくてもハッキリと咳払いをしてから

「それじゃあ、私たちはここで……」「

「そうですね。後は若い一人同士で……」

「この世界でも、同じなのか。

定型文のようなセリフを言いながら退出していく姉様とリナ嬢の母親と思われる女性を見送る。

さて、どうしたものか…

退出した二人を見送った俺は、目の前で真っ赤なトマトになり湯気を上げている少女になんと声を掛かればいいのか、悩むのであった。

第6話（後書き）

主人公の政略結婚と、軽いチートの話。

第7話

羞恥心で俯き小さくなっている私の目の前に、カチヤといつ音と共に紅茶を入れたカップが置かれた。

その音に釣られて顔を上げるとポットを持った二ール様と目が合い、安心するよな笑みをしながら優しく話しかけてくださる。

「素人が淹れた物だから美味しいか保障できないけど、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

笑顔と勧められたものを断れなくてカップを手に取り、一口。

「美味しい」

「ありがとうございます」

プロの人を入れたものとは比べることは出来ないけど、それでも美味しいと自然に思えるほどの出来である。

それにミルクティーといかないまでも少量のミルクと砂糖が入っていて、甘党の私としては好みの味であり自然と頬が緩んだ。

ふと視線を二ール様に向けると、カップに入った紅茶を飲みながら自分と同じように軽く頬を緩ませていた。

そんな表情を見ていた私は、この見合い話を聞かされた時から思っていた疑問がポロリと漏れてしまった。

「ニール様は、このお見合いをどう思つていらっしゃるのですか？」

片や“魔術師”の異名を持つ天才の皇族、片や工場の社長令嬢の私、10人に聞いたら10人が「不釣合い」という評価を下す組み合わせである。

政略結婚を考えたが、私と結婚して得られる物は一応この帝国で唯一の航空機の生産工場が手に入ることくらいであり、メリットデメリットの釣り合いが取れていらない。もちろんデメリットのほうが勝るといつ意味で……

ニール様ほどの方なら引く手数多だというのに、その中から私は選んだ理由を失礼だと思いつつも聞いてみたかった。

「……本当のことと言つとね。今回の話は兄と姉が勝手に決めたものだつたんだ」

「そう、ですか」

落胆はない、といえば嘘になるがニール様のお兄様とお姉様の考えは分からぬが今回の話が本位ではなかつたという答えが聞けて悲しく思いながらも安堵している自分もいた。

しかし、そんな思いも聞こえてきた言葉に吹き飛んだ。

「でも、今は感謝してるよ。今の身分でありながら好きな相手と結婚できるんだから……」

「……え？」

自分の耳と頭がおかしくなっていなければ、ニール様の言葉はプロポーズに聞こえた。

写真を見て一目惚れし、会って話をしてさらに想いが膨らんでいきながら雲の上の人だからと、どこかで諦めていた人が自分を好きだと、結婚したいといつてくれた。

顔を赤く染めながらも、私に思いを語つてくださったニール様に私は同じく顔を赤くしながら答える。

「あ、あのー私も」

「うーあー」

「……ニール。何をしているの？」

「気にしないで下さい。さつきまでの行動に悶えているだけですか
ら」

「……やつ」

見合いが終わり、帰りの車内で頭を抱えて蹲る俺を姉様が呆れた視線を送っているのが感じ取れる。

見合いは、結果だけ言えば成功（？）した。
ほぼ決定事項だったものの、両者が想い合っていると分かつたために予想を超える速さで話が纏まっていき来月には式を挙げることが決定した。

この結果は、あらかじめ覚悟していたから早さ以外は特に驚くことはない。

しかし！
成功（？）するまでの過程が問題なのだ！

どこの恋愛小説に出てくるよつ三流の台詞を吐き出した自分の口が恨めしい。
あっ、思い出しただけで……

「うああああああああああ～」

「煩い」
「あ痛つ！？」

脳天を姉様のチョップが直撃し、考えていたことや想像していた映像が一変に吹き飛んだ。

1ヵ月後、俺とリナ嬢……リナは表面上だけの者を除いても多く的人に祝福されながら夫婦になった。

時に皇暦2008年6月15日、ニール14歳、リナ12歳のことであり、その場にいた一人の男は後に「この時は、あのお二人が“＊＊＊＊”になるとは夢にも思わなかつたよ」と語る。

第7話（後書き）

「リア充自爆しろーー！」と“後への付箋”的話

テルノモア王国
トレスタン王国領を皇国と分譲併合した帝国が新たに国境を接すことになった国である。

さて、今更ながら大陸での帝国の位置について説明しようと思う。
まず大陸の形なのだが、オーストラリア。この一言で説明は終わるというか世界地図を見たら俺と同じような記憶を思つた者は總じてそう言つしかないほど形がそつくりなのだ。

大きさは桁違いで地形がぜんぜん違う点を除くが……

で、帝国の位置は南東にあるシドニー・メルボルン・アデレードの3つを線で繋いだ三角形内が、俺が産まれた時のおおよその帝国領といった場所であり、先の戦争で王国の一部や連合を併合した現在はオーストラリアにある“ダーリング川”と似た“メルノン川”に沿つた巨大な領土を手にしている。

同盟国のトレスタン皇国はプリスペン辺りで、ヴァレンタ皇国はアデレートの北から北西辺り、そしてテルノモア王国はオーストラリアではグレー山脈あたりの、この世界ではシリシア平原とよばれる広大な平原を領土に大陸一の油田を保有する国家である。

油田はどのくらいの埋蔵量かというと、それ一つで帝国の年間消費量を軽く補いつつも他国に輸出する分を残しておけるというレベルだ。

そんな強力な外交カードを持つ王国が先日、帝国にある“条約”を結ばないかと使者を送ってきた。

その内容とは、セオフィラス帝国、トレスタン皇国、テルノモア王国の三国による対神聖連合同盟である。

神聖連合、正式名称は神聖イスラバ連合国。

イスラバ教という宗教を国教とする国々が連合を組んだ、3大列強……いや、2大列強の一つであるが、北側に存在する国の9割が連合に入っている現在では前世の世界大戦時のソ連と同等かそれ以上の国力を持つている。

加えて、イスラバ教を国教としている国に寛容な神聖連合だが、対立宗教を国教としている国、またはイスラバ教の信条に反する国に対しても慈悲である事で有名な国家郡もある。

テルノモア王国はその神聖連合と国境が接しており、現在は良くもなく悪くもない国家関係を維持しているが民間レベルでは宗教観の違いから小さいながらも衝突が発生しており、いつかそれが戦争への火種になると軍備拡張を続けているものの、一国では持てる軍事力には限界がありトレスタン王国と軍事同盟を結ぼうとしていたのだが、帝国に併合されたために頓挫してしまつ。

ならばと同盟相手を帝国と皇国へ変更し、同盟の話を持つてきたといつわけである。

皇国は帝国が結ぶのであれば追随すると非公式の回答を出し、帝国も原油取引価格の引き下げを条件に同盟を結ぶと約束した。

了りして、8月1日。

テルノモア王国領テルカルスにて相互防衛協定「テルカルス条約」が結ばれた。

併せて帝国王国間で「テルカルス通商条約」も結ばれて、三ヶ国と神聖連合の海面下での攻防が始まる。

ちなみに西南大陸はどうなっているかと言つと、手を出せば爆発が確実の「火薬庫」になつてゐる。

他国を圧倒できる軍事力を持てない中小国が密集している場所であり、亡国を逃れるために独立保障や相互防衛協定をそこかしこと結んだために、一箇所でも戦争か内戦が始まつた途端に西南大陸にある全ての国が何処かしらの国と戦争状態へと突入してしまつ場所へとなつてしまつてゐる。

また、西南大陸の人間は愛国心が異様に高く、たとえその国を併合したとしてもその地域の国民を自国民に取り込むことはほぼ不可能に近い。

ならばと国外追放や虐殺民主性などの過激な手段を行おつものなら大陸中の国々がそれを非難し、力ある国は宣戦を布告するだらうし、最悪な事態として内乱が起きる可能性もある。

リターンよりリスクが大きい国々として、帝国主義を唱える我が国では手を出してはいけない国々として無干渉を貫いてゐる。

「食べていいい？」

「……ニールさん、この状況でその言葉は多大な誤解を招きます」

場所は夫婦となつた俺とリナの寝室、時間は就寝前、ベットに腰掛けた俺は膝の間に座るリナを抱きしめながら先の言葉を呟いた。

それに若干、顔を赤く染めながらも声だけは平常心を装いつつ彼女は俺に注意をする。

もちろん、俺も彼女にそういうた邪な感情を抱いての言葉ではなくて、この後にまだ仕事をしなくてはならない俺のために彼女がミカンのような果物で“オレフ”という果物を剥いて、実を皿の上に載せているものに対してだつたのだが確かにこの状況では誤解を招いてしまうだろう。

現に彼女からは風呂上りの良い匂いが鼻腔を刺激し、未成熟ながらも一人の女としての色気を醸し出す首裏は歳不相応の精神を持つ俺でも意識しなければ欲情してしまうものである。

しかも、ここ連日は同盟に關係した軍内部の異動やら任務やらで十分に休みをとることが出来ず疲れが溜まっていて、男はそういうときに三大欲求の一つである“性欲”が膨れ上がりてしまう生き物であつた。リナの子犬属性もそれに拍車をかけてしまい、ついに何か大切な糸が切れたような気がした。

「…………そつか、俺とは嫌なんだ？」

「つ……そ、そういう訳ではなくて！……あつ」

ちょうど剥き終わり手ぶらになつたりナをベットに押し倒し覆いかぶさると。柔らかい毛布が彼女を優しく受け止めて、ベットが小さく上下し衝撃を吸収した。

俺の行動に驚いた表情をするリナは、すぐに今の状況を理解して顔をこれでもかと真っ赤に染め上げて「あの……とか「えと……とか口をパクパクと動かしながら俺の目を見つめた。

俺の記憶では、この世界での最年少出産記録は13歳。リナは現在12歳になり約半年が過ぎた、俺も精神はともかく肉体年齢は14歳であり、法律的にも問題はない。

「リナ……」
「二一、ル…さん」

夫婦になつたからには敬語つけないで名前を予防と提案して「様」から「さん」に変わった呼び方が、今の彼女の表情と相まって恐ろしい威力を發揮する。

さらに、覚悟を決めましたというように目を閉じて何かを待つような体制になつた彼女に俺の理性が……

「んつ……」

彼女の柔らかい唇に触れるだけのキスをして、俺は覆いかぶさっていた自身の体を退かした。

そんな俺の行動に、ホツとした表情をしたりナが直ぐに申し訳ないよな表情になり慌てて俺の服の裾を掴んだ。

「ごめん、ちょっと意地悪が過ぎた」

「い、いえ……ごめんなさい」

「謝ることなこせ」

しょんぼりといった感じで俯いている彼女の頭を軽く撫でて、剥いてくれたオレフの実を齧り、「いつてくるね」といつて部屋を出た。

「こうへらうしゃい」といつ言葉を背に受けながら……

「何やつてんのかねえ、俺は」

「はい？」

「いや、独り言」

「…はあ？」

廊下で待っていた 部屋は防音なため室内の声は聞こえていない
衛兵を引きつれ執務室に向づ途中の廊下で、先の自分の行動
に自傷氣味の笑みと言葉が漏れた。

第8話（後書き）

歴史の残る出来事と、歴史に残らない夫婦のとある風景の話

一人黙々と新聞を読む5歳児の姿を、私は今日何度もかの溜息をつきながら見ていた。

新聞を読んでいる子の名前はニール、私ことルベルトの愛する弟……いや、一回りも歳が離れているためか我が子のような存在だ。実際、外交官である母がないこの家は私が守つていかなくてはならず、妹のトリシアもまだ14歳になつたばかりで「もう大人よ！」と言つがまだまだ子供であるのは間違いない。

今も、お姉さんぶつてニールに何か教えようとしたが質問された内容が難しかつたのだろう、答えられず眉間に皺を寄せて小さく唸つている。

その微笑ましい光景を見ながら、無理もないことだとも思つ。原因が全く分かつてないが会話をすることが上手く出来きず片言になつてしまつニールは、それを補うかのように歳不相応な賢さを持つおり、会話の障害がなくなればと言つ条件付ながらも親しい者達から将来を有望視されている。

だが、それゆえに私はニールの有望さを秘匿しなくてはならない。他家に知られようものなら“出る杭は打たれる”という古代の諺のとおりになつてしまつから……

しかし、この情報が何処から漏れたのか他家の者に知られたらしく、あの子は何度か命を狙われてしまったことが何度かあった。

幸いにも五大家の一つであるル家と交友を深めていたためと、あの子自身の幸運が全てを失敗と言う結果にさせたが、その中の一つの未遂事件で自身の犯した不注意により目の前で危うく弟を失いかけたと思つてゐるトリシアは、それ以降ニールの傍から離れることを嫌つて怪しい人間が近づこうものなら全力でそれを阻止したりしている。

ニールも自分を守つてくれていると分かつてゐるのか、トリシアに懷いていているようで今のように新聞を読んでいたりしてゐる以外は一緒にいようと必死に後を付いて（トイレにはついて行けず入り口でウロウロしている音を見たことはある）回る妹弟の仲の良さを物語つてゐるのだが、巣廻目抜きにしてもそんな可愛らしい一人の兄としては構つてもらえなくて、少し寂しいと思つてしまふ。

そういうえば今年で1歳になるル家のエレンに懐かれていたし、ニールが楽しければと注意していなが世話係のメイドたちとも異様に仲が良かつたな……

将来、ニールが“女説し”にならないことを兄は切実に祈る
とじようか……

ある日の夜。

いつもの仕事を終わらせて、さて寝ようかと自分の部屋に向う途中、楽しそうな声が聞こえて来ると共に微かに良い匂いがして、好奇心から匂いと声がする場所を探つた。

着いた先は執事やメイド達用にと作った小さい厨房で、一人のメイドがコンロの前で感嘆の声を上げていた。

「何をしてるんだ?」

「え?…る、ルベルト様!」

一人で何をしているんだという意味を込めた問いかけに、私がいることに気付いたメイドが慌てて振り向くと胸に抱いていたニールが姿を現した。手には耐熱性の計量カップを持ったまま、突然回転したことにより若干目を回している姿で……

「ニール?」

「…ひや、い

「「…うつ」」

ニールの可愛らしい返事に、私は胸を、メイドは鼻を押さえて呻いた。

まずい。仕事の疲れと就寝前で色々なものが低下している今は、ニールの愛らしさは毒以外の何物でもない。

幸いメイドの前であつたため、上に立つものとしての心構えのお陰で表に出ることのない感情を抑えつつ、今だに鼻を押さえ続いているメイドに再度問い合わせる。

「ん？ 確か彼女は、ニールの世話を一任したメイドたちの一人で名はナナリアだつたはずだ。

まだ小さなニールをこんな時間に連れ出すのは無用心であると少し眉を顰めてしまつ。

「こんな時間に何をしているんだ？」

「は、はい。ニール様がルベルト様に飲んで頂きたい物があるという事でしたので、こちらで調理をしておりました」

「ナナ……」

「あつ、はい」

平衡感覚が戻つたのかニールは多少しつかりした声でメイドの名ナナリア を呼び、ナナリアは予め手順を教えられていたのが小鍋でにかかつっていた火を消すと、手馴れた手つきで中身を陶器の入れ物に移していく。

一見すると玉子スープに見えるが、アルコールに微かに生姜と甘い匂いがして違ひ物だと教えている。

「これは？」

「“玉子酒”と言つ物です」

「兄様…飲む…ぐださい」

聞いた事のない料理名だが、ナナリアに抱きかかえられたままのニールから飲んでほしいという言葉を聞いたからには、兄として飲まないわけにいかない。

眠る前に少し暖かいものを飲むといいと聞いたことがあるために「頂くよ」と言って玉子酒を一口。

「……味…美味しい？兄様」

「……うん。口ざわりが良いし、美味しいよ」

嘘のない正直な感想に、ホツと安堵した表情になるニール。が、すぐに申し訳なさそうな表情になると懸命に言葉をポツリポツリと呟いていく。

「迷惑を一杯……お礼がこれだけ……」「めん、ぐださい」

「！？」

「ナナ、我がまま一杯……」「めん、ぐださい」

「え？」

本当に申し訳なさそうに頭を下げるニールに、予想外のことを言われた私とナナリアは数秒ほど動きが止まってしまった。

確かに、一般的な見方では障害を持つ者がいる家庭は負担があるのだろう。ニールは上手く話すことが出来ないため、相手に対して正確な感情を伝えられずに不快な思いをさせてしまつことも多々あつた。

だが言つてしまえば、ただそれだけのことだ。ニールは上手く話

が出来るよつにトリシアから言葉を懸命に学ぶ姿を見ない日はないし、我がままも同世代の子に比べれば無いに等しくて逆にもつと頼つて欲しいと思つくらいだ。

「違つよ」一ール。私は迷惑だなんて一瞬たりとも思つたことはない
「私も一度たりとも、一ール様のお世話を嫌になつた事なんてありません！」

私達の反論に一ールはキヨトンとした表情になり、その可愛らしさから笑みが零れながらも言葉を追加する。

「ナナリアを含めて、私達は家族なんだ。家族にまで氣を使ついたら息苦しいだろ？一ールはもつと気楽に構えていいんだよ」
「そうです。もつと私に甘えてください！」

……若干ナナリアの言葉に黒いモノを感じるが、それに気付かない一ールは数秒固まつたままであつたがクシャリと顔を歪めて……

「感謝、いたしますわ」
「ふつー？」

予想外すぎる言葉に、私達は盛大に吹き出した。何故？という問い合わせしなくても容易に分かる。

この子に、言葉を教えていたのはトリシア以外にはいないのだから

翌日から、ニールの言語学習の時間に兄とメイドの姿が見えるようになつたのは当然のことかもしれない。

第9話（後書き）

ルベルト視点での、ニールが5歳のときの話

神聖イスラバ連合の立案国であるバルノクス教国内にて、防諜が成された一室で開かれている加盟国の中で連合結成初期時の四ヶ国が集う定例会議で一つの報告が届けられていた。

「セオフィラス帝国、テルノモワ王国、トレスタン皇国による三ヶ国同盟…であるか」

「連合に対抗するための軍事同盟であるのは、火を見るより明らかね」

「それも仕方ないことでしょう。我々連合は大陸の5分2を占める大国であれば、こちらの意思は関係なく弱者は警戒してしまつものですね」

「ケンドリック王、他国を弱者などとは言葉が過ぎるかと思いますか？」

「……失礼した」

畳一枚ほどの大きさまでに縮小された大陸地図を、囲むように4つの人影が立っていて、地図を正面から見ているのは、イスラバ教の聖地であるイスラバを国内に持つバルノクス教国の教皇であるバルノクス22世、本当の名前は宗教上の理由から教皇になると決まつた瞬間にこの世から抹消されている。

齡70に達する男は仙人と紹介されても納得してしまいそうな白い長髪に胸元まである白髭をゆっくりとした動作で撫でつつ、眼前の地図を眺める。

「教皇陛下、どうがなさいましたか？」

「うむ……」

バルノクスの様子にいち早く気付き声を掛けたのは、彼から右隣にいる黒髪をオールバックにしたニールが見れば「室井さん！？」と叫びだすであろう男の名はケンドリック＝オルデウス。

連合のちょうど中心にあるバルノクス教国の南東に位置するアルモア王国の国王であり、王子の時代には数々の戦場へ出陣し、すべてに対しても劣勢な状況からでも勝利を手にしたことから英雄として国民に圧倒的な支持を得ている。

ただ、連勝によるものなのか30代前半と言つ若さからなのか一部の者を除いて相手がどんな人物であろうとも傲慢な態度をとつており、国民の支持と反比例して連合に加盟した各國からはあまり良い目で見られていない。

そして、傲慢な態度をとらない一部の一人であるバルノクス²²世の態度にいち早く気付いた彼は、生返事を返すだけで一向に顔を上げないバルノクスを疑問に思い、目線を追つて辿り着いた国名を無意識に読んだ。

「ヴァレンタ皇国、ですか？」

「……教皇陛下、彼の国に何か思つていろでも？」

バルノクスの左に立っている、先程ケンドリックを窘めた右目にモノクルをはめた銀髪の男が質問すると同時にその国に関する情報を脳内にある引き出しから取り出していき、連合にとって利がある要素を探していく。

彼の名は、ヴィクトール＝バウマン公爵。

教国の東南に位置する貴族主義国家であるルノワイヤ国で政治を支配している一大公爵の一人であり、連合がここまで巨大化しつつも大きな混乱を起こさずにいられるような状況を維持している“影の連合支配者”と言う噂を他国が本気で真偽するほどの人物である。

「……この国は、我ら連合と二ヶ国が開戦する切欠になるのやもしれん」

「……なるほど」

「バウマン公、一人で納得してもらつては困るわ」

納得した言動をとるヴィクトールに、バルノクスの対面に立つていた雪のように白い肌をした金髪を腰まで伸ばした美女が説明を求めた。

彼女の名は、ナーシャ＝アレハンドル。

教国の北の大部分を治めるモスター＝カ共和国の元首にして大陸で唯一女性が治めている国であり、40という年齢であるにもかかわらず20代を思わせる若さと美貌を持ち“国民＝ファン”という団式が成り立つてしまうようなカリスマをもつた人物である。

また、国内に大きな川や国境の大部分が海に面しているために海軍に力を入れており、海軍だけで見れば大陸最強の称号を送つても何処からも不満は出ないだろう。

そんな彼女からの言葉にヴィクトールは「失礼」と謝罪を口にしたあと、少しずれたモノクルを指先で直してから説明するために口を開く。

「教皇陛下には事前にお伝えしたのですが、彼の国に潜ませた者が
ら、「國の兆しあり」と連絡がありました」
「……そういうことね」

「帝国がこの機を逃すはずは無いか」

彼のその一言で場にいる全員が納得した理由は、ヴァレンタ皇国の国内情勢にあった。

民族差別による要職に六が出来て起きる混乱に、差別により不遇な扱いを受けた民族らの「モとその鎮圧に動いた軍との衝突による混乱。

さりには、他国の救援を一切受け付けない現政権のお陰で国内では昼間でも女性は勿論のこと男性でも出歩けない程に治安が悪化していた。

軍が総出でテモの鎮圧と治安維持を行なっているものの限界があり、軍内にも現政権に不満を募らせている者も現れ始めて近いうちに軍事クーデター、もしくはそれに類するものが発生し現政権は崩壊するだろう。

その混乱の極みに達した時に、帝国は皇国へと宣戦布告する。ところは読んでおり、現に帝国は軍を皇国との国境付近に少しづつだが配備し始めていると報告が来てくる。

連合としてはイスラバ教を信仰していない国同士の争いであるために無視してもいいのだが、皇国が帝国領となつた場合に無視できないことが発生する。

連合と帝国との国境が接する中に、連合加盟国の一つであるノーレフ共和国が含まれてしまつ。

神聖イスラバ連合は連合と書つ国家の集合体であるが、実際はバルノクス教国を首都とした一つの国のようなモノになつてゐる。

そしてミノレフ共和国とは金山と鉱山を所有し、多数の鉄道と南大陸唯一の連合領の海港を持ち、海岸沿いは大陸随一のリゾート地といふ連合といふ国の国家予算3割分もの大金を生み出す国なのだ。

仮想敵国である二ヶ国の中のうち帝国という狂犬がよりにもよつて連合の重要な経済拠点と隣接するのはなんとしても避けたいのだが、本国は他国の介入を断り続け秘密裏に送り込んだ工作員の活動で改善を試みるが所詮は焼け石に水程度の効果しか上がりらず、現場から“亡國の兆しあり”という報告が届いてしまつた。

「ケンドリック王、現時点の軍事力で二ヶ国と渡り合えるか？」

「……数ヶ月前でありましたら渡り合えると断言できますが、今は不確定要素が一つあり断言は出来ません」

バルノクスの問いに、ケンドリックは神妙な面持ちで正直な予想を述べる。

彼の表情から思い当たる節があつたヴィクトールは確信を込めて、その不確定要素の名を告げた。

「不確定要素とは、第5皇子のニール＝ラ＝セオフィラスのことですか？」

「……ヘックション！」

「大佐、風邪ですか？」

「んつ……もしかして誰か俺の噂でもしてるのかな？」

「大佐の話が出ない日があるほうが驚きだと思いますが……」

「……いつの間に俺は有名人になつたのだろうね？」

「しかし“鬼神”と比較すれば“魔術師”はまだまだかと思ひます

が」「あんなスター街道一直線男と比較することが間違つてると思つけ

ど」

そんな風に少尉と雑談しながらも、俺の手は止まることなく白い紙に黒い文字を書き連ねていく。

毎日10枚単位で書いてきた甲斐あつての慣れた手付きであるが、目の前でコピー機が印刷している速度で書類を処理していく姿を見せられると慣れてきたのだろうかと疑問に思つ。

さて、既に気付いていると思うが……階級が少佐から大佐になりました。俺はどこぞの赤い彗星か！？

そんな冗談を思いつつも真面目な話、近々ヴァレンタ皇国に戦争を吹つかけるらしい。

対連合戦を想定して国境を接しさせておいたほうが輸送等の面で面倒にならぬに済むし、勝利した場合に国境が接している甲斐ないかで得られる利も変化するためだろう。

そして軍上層部はよほど航空機の軍用化に衝撃を受けたのか、俺に次なる新兵器の開発に期待しているらしい。

そのための先行投資として階級の大佐にして連隊規模の軍隊を持たせた訳でだろうけど、14歳に大佐という階級と連隊を持たせるのに「君達、頭大丈夫か？」と問いたい、恐ろしき実力主義社会である。

まあ、俺より年下のエレナも独立したMTテスト部隊を持つていることだし、今更か……

まあ、当然貰った権力は最大限使わせてもらうけどね。

そして、その権力を行使した結果。スカウトマンが驚くべき発見してくれた。

電磁波研究を行なつている私設研究所である。

航空機が発展していなくて、海軍も飛行艇の偵察と目視での戦闘で充分事足りる状況であつたために積極的に研究されていないのだ。

もうこれはあれだね。天が俺にレーダーを作れといつてるに違いない。

さつそく研究所丸ごと買い取つて技研の研究班の一つとして就職させてからW E P C 社の予算にプラス自身の資財から予算を出した。研究員から引いてしまうほどの感謝をされ、サービス残業は当

たり前で休日出勤すら行いながら、必死と言つ言葉がこれほど当てはまるものはないと思えるほどの気力で開発に精を出している。

試作品はいくつか出来ているが故障しやすく、とてもではないが搭載は出来ない。

強襲偵察MTや偵察機に補助的な感じで搭載し、テストを行なっているが実用化はまだ先になりそうだ。

それとは逆に現時点では自分の連隊のみだが、歩兵装備は強化することが出来た。

歩兵の一般装備である小銃は一発撃つごとに銃身の横にあるレバーを引いて弾薬の装填、排出を行なうボルトアクション方式だったのを、一発ごとに引き金を引く必要があるが弾薬の装填と、排出を自動化した半自動小銃へと変更した。

結果、一分間に撃てる弾数が増やすことと装填中の隙がなくなり、模擬戦では損失が今までの4割も減少させることができたが、変わりに作りが若干複雑化してしまい生産コストと連射可能になつたことで弾薬の消費量が上がり、連射ゆえに命中率も落ちるといったデメリットも出たが兵の命と物資では、兵の命のほうが大事なので問題ない。

そして歩兵追加装備として、ついに完成しました対戦車無反動砲！形状は筒状の中間あたりにグリップと後方に口径が多くなつた後方排出口を持つたフランクのよつた形で、使い捨てではなく装填方式、発射速度は2発／分で重さは約20kg 対戦車榴弾と照明弾と煙幕弾の3種類が使用でき戦車キラーとしてだけでなく後方支援等で活躍することも可能。

欠点は、対戦車榴弾の射程が70mほどしかないので爆破よりもいえ危険は取り除くことは出来ず、反動軽減のためのガス噴射が出来る後方が開けた地形でしか使用できないし、それにより敵に発

見される恐れもある。

各歩兵分隊（10人前後）に1機ずつ配備されていて、ただいま慣熟訓練中。

あと、陸上戦闘機も開発中である。

飛行艇ではどうしても内陸部の戦闘には参加しにくいために滑走路から離陸する戦闘機が欲しいのだが、今のエンジンだと故障が多くて滑走路でしか離着陸で着ない戦闘機は緊急着陸が難しくて運用できない。

エンジンの改良と開発をしてもらい、来月中には試作機が完成するそしたら楽しみだ。

第10話（後書き）

大戦争の足音が近づいてきている話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385m/>

帝国繁栄記

2011年4月11日20時47分発行